

二〇二一年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第二回 二月二日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、漢字の送りがなについてはもとの文章の通りにしてあります。

わたしたちは畑に植えられている草を見ると野菜と思い、はぐれて生えている草を雑草と見なしている。庭の草花についてもほぼ同様であろう。しかし野菜、草花もしくは庭木や棉わたのような栽培植物と雑草とは、大昔からそのように割然わかれと区別くわくべつされていたであろうか。もちろん、いなである。

大むかし、原始に近いころ、人間は野山に自然に生える草木の実や葉や根を採集して食べていたことはどんな簡単な人類史においても述べられている。そのころはたぶんどんな草もみんな雑草といってよかった。がそれらの自然生えの草の中から実の多く大きくつく種類のもの、やわらかで甘味あまみや辛味からみや特別とくべつのにおいのあるものを選んで、種子を蒔まいたり、植えたり、**A**栽培するようになった。それより数千年が経過するうちに稲いねや麦むぎのように栽培植物として固定したものもあるけれど、ある雑草は穀類こくろい、野菜に引きあげられたが、好みの変化や新しい栽培品種の開発などのために耕地から追い出されて、元の雑草に舞まいもどつたものも少なくない。そうかと思えば、アフリカのサバンナ地帯では、今でも湿地しじちにひとりで生えて実を結ぶ原始的な稲いねの穂ほを刈り集めるのはまだしも、エノコログサに似たイネ科の草の実を採集して主食に宛あてているという。その草をじっさいに見た人の話によると、まったく日本のエノコログサそっくりで、その実の粒つぶはエノコログサの粒よりもっとこまかいが、それでも丹念たんねんに集めて主食にしているというのである。雑草から穀物用の草に出世する途上とじょうにあるよい一例といえよう。

ついでにいえば、エノコログサはネコジャラシともいって、麦に似た穂で毛が生えているから、一昔まえは子供たちがその穂で相手の首や頬ほおを撫なでてすぐつたがらせ合つたものだが、雑草として生き強く繁殖力旺盛はんしよくわうせいで、畑作りには今でも難物の一つである。し

注 *割然と……はつきりと。

かし種類も多く、穂もかなり大きいから、ひどい食糧難でもおこったら、その小粒の実の中から澱粉だけを取り出して食べることに
ならないとはいえない。 **B** 他の穀類の品種改良が大いに進んでいるから、今さらエノコログサでもあるまいが、 **X** 雑草と栽培
植物の境は地域や文明度によって異なるのである。

反対にごく近年穀物から除名されたものとしてヒエをあげよう。②ヒエははるかな大昔から重要な穀物の一つで、稲の育たぬ田や麦
のできぬ山畑でひろく栽培された。モチヒエという改良種までつくり出されたことが作物としての重要性を何よりもよく示してい
る。遠州の秋葉山から三河の鳳来寺にぬける山の中で、オランダ画家として知られた司馬江漢が弁当の握り飯を食べていると、そば
で孫をつれた老婆がこれを見て「江戸に生まれたかたは羨ましい。そんな米が食べられる。自分たちは、山の中で一生ヒエやアワに
木の芽やドングリをませたものしか食べたことがない」といったので、江漢は残った握り飯を子供にやったら、上等のお菓子でも食
べるように食べたという。おそらく、遠三の国境あたりのことであろうが、山村ではヒエは主食だった。じつはわたしは、子供の
ころ一度だけヒエを食べたことがあったような気がする。自分の家でなかったことはたしかだが、どこでどういう機会に食べたかと
いう点になると茫漠として何も思い出せない。そのころアワという穀物があつたが、そのアワ粒よりもっとこまかで、アワよりも灰
いろがかった黄いろな粒々で、ねばりも甘味もないポソポソして咽喉にひっかかりそうな気がしたようにおぼえている。がその記憶
もたしかではなく、後で自分でこしらえたものかもしれぬ。ともかくヒエというのが、けっして食欲をそそるような食物でないこと
だけはまちがいが無い。

がしかし少なくとも江戸時代末までは、山村においては主食に近い役割、農村でも補助的主食あるいは保存食糧で、天災や冷害の
ために飢饉のおそれがあるとき、領主たちは領民にヒエを蒔くことを命じるのが常だった。ヒエはきわめて強い穀物で、かなり悪条
件の気候の下でもよく成長し、よく結実したから、いわゆる救荒植物の第一に位していたのである。

昭和をはじめまで、山村では、まだヒエを栽培するところが少なくなかった。が戦時中、配給制度ができて、米があらゆる山奥ま

でゆきわたるとともにヒエの栽培は急速に衰退^{すいたい}していつて、戦後十数年でほぼ完全に消滅^{しょうめつ}したらしい（今では観光客相手にヒエ飯を食^たべさせるところがある由^{よし}）。栽培はやめになっても、ヒエそのものが消滅したわけではない。ヒエは稲田^{いなだ}に潜入^{せんじゅう}、稲のための肥料をたんまり吸^すって、植えた稲のあいだでたくましく育つようになった。田草取りの中でも主要な敵はヒエであったこと、田をつくつたことのある人々はみんなご承知のとおりである。③ということは、ヒエは穀物の地位を追われて雑草仲間^{ざそうちゅう}に身をおとしたということにほかならない。

このように雑草と野菜等々栽培植物との間には入れ替え^かがしよつちゅうおこなわれている。

そういう意味では、すべての雑草は栽培植物の候補者であり、今作られている野菜等々もいつ雑草におとされるかわからない。もつとも一度人手にかかり改良された植物はひよわ^{ひよわ}になっていて、雑草として生きのびる力をもつておらず、たいてい滅^{ほろ}び去るものだが、改良種の中にも牧草類のごときは栽培によって一段とたくましさを増したようだ。牧草のイタリアン・ライグラスやオーチャード・グラスは、主として厩堆肥^{うまやたいひ}にまじって牧草畑以外の一般^{いっぱん}の畑にも進出しているが、しなやかで牛でなくても食べたいような葉だなあと油断していると、たちまち白い根をまわり一めに張りめぐらして巨大な株になり、手で引っぱったくらいではぜんぜんお感じがなく、^{*}備中鋤^{びちゅうあき}を振^ふって根こそぎにしようとするれば、鋤のさきがへなへなとまがってしまう。ススキの草むらみみたいなもの^④だ。④こういう草なら自分の畑から脱出^{だつしゅつ}しても、雑草として堂々と胸を張って生きてゆけるであらう。

とはいももの、畑や道端^{みちばた}で、雑草の栄枯盛衰^{えいこせいすい}を見ているうちに、一つの傾向^{けいこう}がはつきり感じとれる。というのは、日本在来^{にっぽんざいらい}の雑草がいたく減^へって、そのかわり、舶来種^{はくらいしゅ}がいたるところでのさばっているのである。春の七草はまだよいけれど、秋の七草ともなれば尾花^{おぼな}（ススキ）とクズとを除いては、野山からほとんど姿を消して、むしろ山野草ブームの中で庭で栽培されているのを見かける

注 *備中鋤……刃の部分^やを二本から五本のくしの刃状とした鋤。

方が多い。そして空地には、一むかし前は舶来の雑草で鉄道草とか貧乏草とか渾名のついでにヒメムカシヨモギが繁茂するならわしだったのに、今では黄いろの房穂をいちめんにつけて二メートル以上にそびえ立つセイダカアワダチ草が猖獗をきわめていること、すべての人がご存じのとおりである。セイダカアワダチ草の花粉が喘息をひきおこすというのは真実ではなく、あらぬ濡れぎぬを着せられたのだが、ただこの草の強力無比な繁殖力の前にはかの鉄道草さえたじたと後退したことはたしかである。アワダチ草は、ただそこらの空地を占領しただけでなく、スカイラインなどの開発に伴って山の上まで登ってゆく。コカコーラ並みの普及ぶりといつてよい。

このように外国原産の雑草がはびこっているということは、反対に日本産の雑草がほろんでしまうというほどでないにしても、衰退して片隅に押し込められたことを意味しよう。

その現象は、わたしの耕作している二反五畝の畑にもはっきりあらわれている。さきにふれたエノコログサをはじめチカラシバやメヒシバのようなイネ科の雑草は、繁殖力旺盛でしつこくて今もわたしを苦しめてやまぬけれど、それでも舶来のイタリアン・ライグラスがそばで茂りだすと、国産雑草中の強剛たちもまったく影が薄くなってしまふ。もう一種、土にへばりついて葉腋ごとに根を張って草取りに苦労させるが、春には美しい瑠璃色の花を目的のように開いてみせるイヌノフグリも小型の日本種はほとんど消えうせて、外国渡来の大イヌノフグリがもっぱら縄張りをひろげているし、蓼食う虫も好きずきと諺にまでうたわれたタデも草むらからすっかり姿をひそめて、そのかわりにかなり早く渡来したイヌタデが猛威をたくましくしていると思つたら、この数年来、新しい舶来種で巨大な大イヌタデが進出してきた。そのためにかつて畑に少なくなかったスマレヤホトケノザのひなびた可憐な花はめつたに見かけられなくなった。

じつさい、畑や道端の雑草の六十〜七十パーセントは舶来の雑草によって占められている。種類の数ではなく、その占拠する面積の比率である。

こういうことになったのは、舶来種がたくましく繁殖力旺盛なためだけではなく、農業のいわゆる近代化が急激に進んだせいでもあろう。農薬が相対的には小さくてひよわな日本の雑草を根絶やしにしたうえ、トラクター等による深耕によってちっほけなスミレやホトケノザ等々は土の底深く根ごと葉ごと埋められてしまうが、二十センチ三十センチの深い土を押し分けて地上に芽を出すだけの力をもっていない。従来の鋤や鍬による耕起なら、しかるべき季節となれば、かぶった土をわけて芽を日光の下に出すことができるのに、トラクターにかかつては永遠の闇の中で根も葉も朽ちはてる以外の運命はない。

このように雑草の世界では大きな変化がほぼ完了しているが、これを雑草界の近代化と名づけてよいだろう。日本文化や精神の世界は雑草と同じではないとはいえ、まったく無関係とはいえない。雑草を通して今の日本人の精神や文化のありかたや姿がいくらか見透せるのではなからうか。

(杉浦明平『雑草世界の近代化』)

注 *猖獗……猛威をふるうこと。

*二反五畝……約二千五百平方メートル。一反は約千平方メートル。一畝は約百平方メートル。

*葉腋……葉の付け根。

問一 A・B にあてはまる言葉を次の1～6からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使っては
いけません。

- 1 だから 2 けれども 3 なぜなら 4 もっとも 5 すなわち 6 たとえば

問二 ～～～～線ア 「渡来」の「来」と同じ使われ方をしているものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 年来 2 従来 3 在来 4 外来

問三 ——線① 「栽培植物と雑草」について本文の内容にあてはまらないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 原始に近いころ、野山に自然に生える植物は、人間の食べるものも含めて全部雑草といってよかった。
2 アフリカのサバンナ地帯では、日本の草によく似た植物の実の粒を丹念に集めて主食にしている。
3 エノコログサは生命力の強い草であり、生えている地域を問わず人間には害となる植物である。
4 栽培植物と雑草をどのように区別して考えるかは、地域や文明度によって異なっている。

問四 ——線② 「ヒエははるかな大昔から重要な穀物の一つで」とありますが、ヒエが「重要な穀物の一つ」とされた理由がわかる一文をぬき出し、はじめの五字を書きなさい。

問五 —— 線③ 「ヒエは穀物の地位を追われて」とありますが、その直接の理由としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ヒエは、ねばりも甘味もなく食欲をそそるような食物ではなかったから。
- 2 戦後は飢饉がなくなり、領主からヒエを蒔くよう命じられなくなったから。
- 3 戦時中の配給制度によって、米が山奥までゆきわたるようになったから。
- 4 ヒエは稲田に潜入して、稲のための肥料をうばい取ってしまったから。

問六 —— 線④ 「こういう草」とはどのような草のことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一度改良されたにもかかわらず、強い生命力をもっている草。
- 2 栽培植物の候補として、一般の畑でも栽培され始めている草。
- 3 しなやかな葉をもち、牧草として非常に高い利用価値をもつ草。
- 4 外国から輸入され、長い時間をかけて日本の気候に適応した草。

問七 —— 線⑤ 「かの鉄道草さえたじたじと後退した」とは具体的にどういふことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 ———線⑥「雑草界の近代化」とはどういうことですか。四十字以上五十字以内で具体的に説明しなさい。

問九 ———線X「雑草と栽培植物の境」とありますが、どのような特徴とくちょうを備えていれば植物が「雑草」ではなく「栽培植物」となり得るでしょうか。本文を参考にしながらあなたの考えを七十字以上八十字以内で書きなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

「……登校するとき、手袋をなくして。」

ぼそぼそと、自信なさげにその唇が動く。

わたしは野見山くんの両手をぱっと見た。そう言われてみると、左手には黒い手袋をはめているのに、右手は肌が丸見えだ。指先がかじかんで赤くなっている。

「このへんに落としたりしたこと?」

「落としたりっていうか、投げた。」

「『投げた?』」

「雪を丸めて、田んぼに向かって何回か投げてるうちに、すぼっと脱げちゃって……。」

はつきりとは言い切らずに、野見山くんは人さし指で正面をさす。

そこに広がる田んぼの表面をわたしはじっくり眺めてみた。ぶ厚い雪のじゅうたんのところどころに、動物の足跡^{あしむと}にしては大きすぎるへっこんだ部分があった。どうやらそれが、雪玉を投げこんだっていう跡らしい。

……っていうか、雪投げて手袋なくすって!

「ぶふっ。」

我慢^{がまん}できずに噴き出すと、優等生の頬と耳がみるみる真っ赤に染まった。

「ごめん、ごめん。」

わたしの謝り方はどう考えても雑だった。だけど、こみあげてくる感情をすぐにしずめるなんてできなかったんだ。

自分と同学年の山村留學生^②が現れてからというもの、ずっと張りつめていた身の回りの空気がふいにゆるみだして、おかしくて、

わたしはけらけら笑い続けた。

濃い茶色の睫毛を伏せ、野見山くんは気まずそうに立ち尽くしていた。思いつきりばかにされたのでつんと拗ねているようにも見えた。その素直なりアクションが妙にうれしかった。

「の、野見山くんさあ！ 雪投げるの、そんなに好きなの？」

「だって……投げたくならない？ こんなにたくさん積もってたら。」

「そうかなあ。毎年これくらいは必ず降るよ。」

「僕はこんな景色、今年はじめて見たんだ。千葉じゃめったに積もらないから。降っても水っぽくてべしゃべしゃだったりして、うまく丸められないし。」

「丸められない雪って、それほんとに雪なの？」

尋ねると、野見山くんはきよとんとした。

そしてあらためて周囲を見渡して、ふふふ、とくぐもった声を洩らしたと思つたら、堪えきれなくなったようにくしゃつと笑った。

「そうだね。こっちがほんとの雪だ。」

それはわたしの発言にウケたわけじゃなく、はしゃいで手袋を投げてしまった今朝から、いやもしかしたらもつとずっと前から、

野見山くんの中で温められていたらしいおかしさが、ぽこんと表に飛び出てきたような笑顔だった。

ひと月見てきた中でいちばん、いきいきとしてる。

だからわたしも、思いつきり笑った。

お互いの口から真っ白い息がほわつと立ち昇って、布地に隠されていない頬っぺたは冷えきって感覚がなかったけど、ただ胸のあたりだけがじんわり熱かった。

「ねえ、手袋は春になったらきつと出てくるから、今はあきらめなよ。これ貸してあげる。」

つけていた赤い手袋をわたしが外して差し出すと、野見山くんはぎよっとして、首をぶんぶん横に振った。

「わたしは平気。ほかにも持つてるから。」

遠慮しないで、と押しつける。

だけど、この反応って、赤い色が好きじゃないって意味なのかも。迷惑だったかなあと後悔し始めたころ、野見山くんはやけに真剣な面持ちで手袋をさっと受け取り、片方だけ着けていた黒いのを外してポケットにしまうと、わたしの赤いのをきゅっきゅっと両手にはめた。サイズはぴったりだった。

「桑島さんは、ずっと……僕のこと、避けてたよね。」

感触をたしかめるように十本の指を動かしながら、そうつぶやいた。責める調子ではなく、あくまで確認だというように。ああ、とつくにバレてたんだ。

面と向かって言われてしまっても意外だとは思わなくて、そりゃそうだよねって、納得する気持ちのほうが大きかった。

「それごめん。でも、嫌いってわけじゃないよ。よそから来る子が苦手なだけ。」

嘘なんかついてもしようがないと感じたから、素直に話した。むしろわたしはこの機会を待っていたのかもしれない。もやもやしたままでいる過去のこと、わたしにとっては大事なそのことを、聞いてくれる誰かをずっと探していた気がした。

「野見山くんは知らないだろうけど……四年生のとき、ひとり、東京から留学生が来てたんだ。城崎イズミちゃんっていう子。」

カラフルな花の刺繍が入ったデニムスカートがよく似合い、日に焼けた肌と明るい色のカールした髪が特徴的な、かわいくて活発な女の子。

十歳になる年の春、イズミちゃんは転入してきて、わたしの唯一の同級生となった。

「みいつきちゃん！ いるー?」

「はーあーいー。イズミちゃん、もう宿題終わったの？」

「遊びたいから急いで終わらしたよ！ ね、きょうは何しよっか。」

彼女の登場は、それまでの日常をまるつきり違うものにしてくれた。

なにせ小学校入学以来はじめて同級生を得たわけで、天から降ってきたこのプレゼントにわたしは有頂天になった。

お気に入りの文房具を交換したり、川遊びに出かけたり、連休にうちでお泊まり会をしたり。とにかくわたしはイズミちゃんにべつたりくつつき、離れようとしなかった。身長体重がほぼ同じだったから「まるで双子みたいだなあ。」と大人たちからしょっちゅう言われ、そのたびふたりでばつと顔を見合わせ、跳びあがってはしゃいだ。

つないだ手を振り回して通学路を歩きながら、イズミちゃんが来てくれてよかった、満希ちゃんがいてくれてよかったと口々に言うのが日課ようになっていて、「一生親友ね！」とわたしたちは何度も誓い合った。

イズミちゃんはどんなときも明るくて、目を一本の線になっちゃうくらいきゅつと細めて笑う。学校行事の話し合いのときには、手をあげて自分の意見をはっきり言い、しかもおもしろいアイデアをつぎつぎに思いつくので、周りのみんなの気分を盛りあげてくれる。

ルールの多い寮生活にもすぐ慣れたようだったし、「たくましくなってきたさい。」ってお父さんとお母さんに言われたから。と、週末に催される山歩き会や乗馬合宿、近隣町村合同のプラスバンドの練習にも必ず参加していた。まるで山村留学のパンフレットに書かれている紹介文そのままに、順調に〈豊かな自然の中でのびのびと成長〉していた。

はずだったのに。

夏休み明けの始業式の朝、イズミちゃんは登校してこなかった。

教室の窓側半分の四年生エリアには、机がひとつだけぽんと置かれていた。その意味がわからなくて、わたしは通学かばんをしまったまま、席の横に立って朝の会が始まるのを待った。

やがて当時の担任の吉敷先生が現れ、わたしの姿を見ると、手で「座って。」と合図をした。

そして眼鏡をかけて学級名簿めいぼを開きながら、先生は肩かたでため息をついた。

「きょうから二期が始まりますが、残念なお知らせをしなければいけません。イズミは前の学校にもと戻ることになりました。……東京での暮らしが恋こいしくなってしまうみたいなの。山村留学を決めたのはイズミ自身だけど、おうちの方の強い希望もあったようだから、期待⑧をかけられすぎて無理しちゃったのかもしれないね。あとで、みんなの手紙を書いて送りましたよ。」

……うわあ。

うわあ、うわあ、うわあ。

目の前がぼやけてきて、それ以外のことははとっさに浮うかんでこなかった。吉敷先生がまだ何かしゃべっていたけど、その声はわたしの耳をふわふわ通り抜ぬけ、背筋がすうっと冷たくなっていくのを感じた。

イズミちゃんはこの村での生活が嫌いやだったんだ。学校でも寮でも慣れたふりをしてがんばっていただけで、本当はつらくてたまらなかつたんだ。

そんな場所にずっといさせるのはかわいそうだし、もとの街に帰れたならよかつたじゃない。頭ではなんとかそう判断できた。

だけど同時に、心がぎゃんぎゃんわめいていた。

イズミちゃんにとってわたしは **A** なんかにじゃなかつた。今までに立てた誓いはぜんぶ嘘。ほかの大事な何かとくらべたときに、簡単に捨てていっちゃえる程度のもの。きつと離れたらわたしのことなんかすぐに忘れてしまう。

十歳の世界がひっくり返った出来事だった。

イズミちゃんはわたしに何もメッセージを残さず、わたしもイズミちゃんに手紙を書くことはついになかつた。四年一組は生徒一

名に戻ったけど、八名もいる三年一組との複式学級だから教室はいつも賑やかで、でも気持ちはどこか冷えたままだった。

この一件からわたしは学んだ。

よそからやってくる子とは、あんまり親しくならないほうがいい。ずっといっしょにいられるなんて思っちゃいけない。そんな勘違いをしたら最後、つらい目にあうのは自分だから。

あくまで〈お客さん〉なんだ。

だからもちろん、翌年現れた野見山行人と友達になりたいとは思わなかった。

……もうこりこり。勘弁してほしい。

どうせかぎられた時間しかここにいないのなら、これ以上かき乱さないで。

こわいよ。

イズミちゃんのことをどれだけ正確に話せたかはわからない。

わたしは思い浮かんだ順に物事をしゃべりがちだから、口は感情のままに動いて、話はこんがらがって、ずいぶんわかりにくかっただろうと思う。でも野見山くんは遮らずに黙って耳を傾けてくれた。

そしてわたしがひと通り話し終え、はあっと息を吐いたのを見計らって、口を開いた。

「僕は帰らないよ。これからずっとここにいる。」

あまりにきつぱりした言い方だったから、一瞬、そうなんだとうなずいてしまいそうになった。だけどすぐに、それはありえないと気づく。

「『ずっと』？ ……だって、二年までってきまりでしょ。」

「戻る学校がある場合はね。」

優しく諭すような大人びた口調だった。その落ち着きはらった表情に、なぜか心がざわめきだした。¹⁰
茶色い瞳がわたしを映してまたたいている。

「だけど僕は、東京の私立をやめてここに来たから。再入学は難しいし、したくない。だから来年も再来年も、その先も、寮で暮らしながら村の学校に通わせてもらう。どこにも行くつもりないよ。」

野見山くんはそう言い、わたしがゆっくり事情を呑みこむのを待っていた。

わたしはぼんやり相手の顔を見ていた。告げられた内容は筋道が通っているとわかるのに、何かがひっきりかき、すっと受け止められずにいる。

どういうことだろう、前の学校をやめてきたなんて。有名なところって話だったけど、もうそこに通う気はまったくないわけ？
そうまでして山村留学を選んだってこと？

来年も、再来年も、この村でいっしょに暮らす……？

そのとき突然わかった。わかってしまった。

野見山くんが今言ったのは、自分には帰りたい場所がないって話なんだって。戻ろうと思うところなんか、どこにもないんだって。それってさみしいよ。つらくないの。反射的に思う。

⑪ だけど同時に、わたしがそんなふうを感じるの、まして同情なんかするのは、完全に間違っている気がした。

「……でも僕がいると、桑島さんは嫌だね。ごめんね。」

かほそい声で申し訳なさそうに野見山くんは言い足した。

わたしはまだぼかんとしていて、それからはっとして、慌てて首を横に振った。左右の頬に髪が当たり、ちよっと痛いぐらいの勢

注 *複式学級……二つ以上の学年の児童・生徒から編成されたクラス。

いじ。

「いたいなら、好きただけいればいいよ！」

やたら力強く叫んでしまい、遠くの山のほうまでわあんと響いた。集まっていた鳥たちが驚いて羽ばたく音が聞こえた。野見山くんも大声に気圧されたようにびくつと肩をすくませた。

ばちばちとまばたきをする。こくつと息を呑む。

そしてわたしに言われたことを、間違いのないようしつかり吟味するみたいにしばらく黙ったあとで、

「ええと、じゃあ、……そうする。ここにいられたら、うれしい。」

そう言ってへらりと笑った。

その笑い方もいいな、もつとそういう顔してくれたらいいのにな。

口には出さずに、こっそり思った。

これ借りるねと言いたげに、野見山くんが手袋をした両手をわたしの顔の前に掲げたから、わたしも両手をあげた。

ぶわつと雲みたいな息を吐きながら、ぼん、と宙で四つの手のひらを打ち合わせた。

この日以来、五年生二名はいっしょに下校するようになった。大事な山村留學生が用水路に落ちこちたりしないよう、地元住民として鋭く目を光らせる必要があるからだ。……なんて理由はタテマエにすぎなかったけど。

会話が増えていくうちにだんだん、野見山くんは単なる優等生じゃないのが明らかになってきた。たしかに成績がよく、先生たちも驚くようないろんな知識をもっているけど、それは自分が不思議に感じたことを気の済むまで調べて掘りさげていくからで、つまりは好奇心が強い。だから大人しか好まないような苦い山菜やら酸っぱい漬物やらも食べたがる。

そのくせテレビ番組や漫画には興味が薄くて、マラソンは苦手で、球技は少し得意。

ひとの悪口は言わないし、汚いことばもつかわない。基本的にこにこしていて、ちょっと天然なところもあるけど、焦るともの

すごく早口になる。

そんな相手といるとちっとも飽き^あなかった。要するにわたしたちは気が合ったんだ。

「ゆきと！」

「みつき。」

お互いを呼び捨てするようになったころ、春がめぐってきた。

あの田んぼの持ち主にお願いで、米づくりが本格的に始まる前にすみずみまで探させてもらったというのに、雪の積もった朝に行人が投げてなくなった黒い手袋の片方は、どうしてか出てこなかった。きつねが持っていたのかもしれない。

そのことを知った千葉のお母さんが、すぐに新しいものを買って送ってくれたそうだけど、¹⁴行人は骨が成長してだいぶ窮屈^{きゅうくつ}になっ
てしまうまで、わたしの赤い手袋を借り続けた。

(真島めいり『みつきの雪』)

問一 ―― 線①「雪のじゅうたん」とはどのような様子のたとえですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 雪がとけかけていてやわらかそうな様子。
- 2 山で生きる者を優しくつつんでいる様子。
- 3 積もった雪が辺り一面をおおっている様子。
- 4 見わたす限りどこまでも同じ色である様子。

問二 ―― 線②「山村留学生」について説明した次の文の I ～ III にあてはまる言葉を書きなさい。ただし

III には漢数字を入れなさい。また、II にはあてはまる言葉を文中から一語でぬき出しなさい。

I か月前に II からやって来た、小学校入学以来「わたし」にとって III 人目の同級生である野見山くん。

問三 ―― 線③「ずっと張りつめていた身の回りの空気」とありますが、なぜ「わたし」の身の回りの空気はずっと張りつめていたのですか。もつとも適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 別れがつらくならないように、山村留学生である野見山くんと親しくならないよう身構えていたから。
- 2 都会育ちであることを鼻にかけた野見山くんのいけ好かない態度を、普段から腹立たしく思っていたから。
- 3 山村留学生である野見山くんと親しくなりたいとは思いつつも、話しかける勇気を持てずいたから。
- 4 近寄りがたい雰囲気をもし出す野見山くんに対し、緊張と遠慮の入り混じった気持ちを抱いていたから。

問四 —— 線④「ほんとの雪」とありますが、なぜ「ほんと」なのですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「わたし」の気をひこうとして、ほんとの雪かどうか確信してはいなかったが、あえて同意しておこうとしたから。
- 2 たくさん積もった雪を見たのが生まれて初めてだったので、その雪の多さに驚くとともに、こわさを感じたから。
- 3 いままでは雪を丸めることができなかったが、雪投げをして、ようやくうまく丸められるようになったから。
- 4 以前住んでいた場所では水っぽい雪が時折降るだけだったので、丸められる雪こそが雪らしいと感じたから。

問五 —— 線⑤「野見山くんはぎよつとして、首をぶんぶん横に振った」とありますが、なぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 避けられていた相手からの申し出に驚き、借りるのは申し訳ないと思ったから。
- 2 女子から赤い手袋を借りることがとても恥はずかしく、遠慮したいと思ったから。
- 3 手袋をしていなくても寒くないので、借りる必要性をあまり感じなかったから。
- 4 大切な手袋を探すのをあきらめきれず、一人だけでもつとよく探したかったから。

問六 —— 線⑥「有頂天うちやうてんになった」の意味としてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 喜びのため夢中になった
- 2 日常を忘れて振り回された
- 3 思いがけず興奮した
- 4 どうしてよいかわからず混乱した

問七 —— 線⑦「先生は肩かたでため息をついた」とありますが、ここに表れている先生の心情の説明としてもっとも適当なものを次の

1～4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 イズミとの思い出を振り返り、ともに過ごした日々を懐かしんでいる。
- 2 イズミが突然東京へ戻ってしまったことに対して、がっかりしている。
- 3 イズミの東京へ戻った原因が自分にもあると思ひ、責任を感じている。
- 4 イズミにもっとしてやれたことがあったのではないかと後悔している。

問八 —— 線⑧「期待」とありますが、イズミがかけられた「期待」の内容を文中から十二字でぬき出しなさい。

問九 —— 線⑨「その声はわたしの耳をふわふわ通り抜け、背筋がすうっと冷たくなっていくのを感じた」という「わたし」の様子としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 吉敷先生が優しく話してくれたので何となく安心してしまったが、だんだんと何が起きたかわかってきた。それでもなお優しくおだやかな先生の口調に強い違和感いわかんを抱いている。
- 2 吉敷先生の声を聞いても、目の前の事態がまったく飲み込めないので実感がわかずにいる。そして明日から仲間はずれにされて孤立こりつしてしまうことを確信して落ち込んでいる。
- 3 吉敷先生の声ができることだけはかろうじてわかるが、人数の多い三年生の話し声がじゃまになってなかなか聞こえてこない。きつと大事な内容なのだろうと思ひ、困っている。
- 4 吉敷先生が何か話しているが、内容はまったく頭に入らな来ない。ただその内容がイズミちゃんの転校に関することだとばかり、受け入れがたい事態が起こったのを感じている。

問十

A

にあてはまる言葉を文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問十一

——線⑩「その落ち着きはらった表情に、なぜか心がざわめきだした」とありますが、なぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 戻る学校がないということをやかに話す野見山くんの姿に理由もわからず興味を抱いてしまったから。
- 2 戻る学校がないということをおだやかに話す野見山くんの姿に理由もわからず疑問がわいてしまったから。
- 3 戻る学校がないということをしみじみと話す野見山くんの姿に理由もわからずむなしさを感じてしまったから。
- 4 戻る学校がないということをおおずと話す野見山くんの姿に理由もわからず後ろめたさを覚えてしまったから。

問十二

——線⑪「……でも僕がいると、桑島さんは嫌だよ」とありますが、野見山くんが「わたし」に対してこう言ったのはなぜですか。四十字以上五十字以内で書きなさい。

問十三

——線⑫「なんて理由はタテマエにすぎなかった」とありますが、「タテマエ」ではない本音としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 地元住民として、大事な山村留學生がまたひとり前の学校に戻ってしまうのではないかと心配だった。
- 2 地元住民としてよりも同級生として、好奇心や知識のある山村留學生と一緒にいることが楽しかった。
- 3 前の学校に戻りたいと思っている山村留學生が気の毒で一緒にいるが、心は許さないようにしていた。
- 4 山村留學生の手袋を何とかして用水路から一緒に見つけることが、地元住民としての義務だと思った。

問十四 —— 線⑬ 「野見山くんは単なる優等生じゃないのが明らかになってきた」とはどういうことですか。もっとも適当なものを

次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 野見山くんは優等生に見えていたが、実はまったく大したことのない平凡な人だとわかって失望したということ。
- 2 野見山くんとは同級生として打ち解け合い、彼の一つ一つの個性は大した問題にならなくなってきたということ。
- 3 野見山くんの優れた点に加え、興味の薄いことや苦手なことを含めた豊かな人間的魅力が見えてきたということ。
- 4 野見山くんがどのような分野でも飛び抜けた実力を持っており、驚くほど何でも器用にこなしていたということ。

問十五 —— 線⑭ 「行人は骨が成長してだいぶ窮屈になってしまっまで、わたしの赤い手袋を借り続けた」とありますが、この部分からどのようなことがわかりますか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。



次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 屋上で天体をカソソクする。
- 2 仲間とのケツソクが固い。
- 3 目標にシヨウジュンを合わせる。
- 4 初詣はつしげは年始の風習のテンケイの一つだ。
- 5 ハロウィーンでおばけのカソウをした。
- 6 潔く事故の原因を認める。

問題は以上です

